

パパラギ —はじめて文明を見た南海の酋長ツイアビの演説集（岡崎照男・訳）**○パパラギとは**

パパラギ（パンラギ）は現在の南太平洋に散在する島々の全般にわたって、ヨーロッパ人（白人）と同義語として使われている。同時に文明人としての意味も持つ。

○考えるという重い病気—考えること

考えること、考えたもの、思想——これは考えたことの結果である——は、パパラギをとりこにした。彼らはいわば、自分たちの思想に酔っぱらっているようなものだ。日が美しく輝けば、彼らはすぐに考える。「日はいま、なんと美しく輝いていることか！」彼らは切れ目なく考える。「日はいま、なんと美しく輝いていることか」これはまちがいだ。大まちがいだ。馬鹿げている。なぜなら、日が照れば何も考えないのがずっといい。かしこいサモア人なら、暖かい光の中で手足を伸ばし、何も考えない。頭だけではなく、手も足も、腿も、腹も、からだ全部で光を楽しむ。皮膚や手足に考えさせる。頭とは方法が違うにしても、皮膚だって手足だって考えるのだ。

だがパパラギにとって、考えるということは、道をふさいでどげようもない、大きな溶岩の塊のようなものだ。楽しいことも考えるだろう。だが笑いはしない。悲しいことも考えるだろう。だが泣きもしない。腹がすいても、タロ芋やパルサミを食べるわけではない。（中略）

パパラギの生き方は、サバイマで舟で行くのに、岸を離れるとすぐ、サバイへ着くのに時間はどのくらいかかるかと考える男に似ていると言えるだろう。彼は考える。だが、舟旅のあいだじゅう、周りに広がる美しい景色を見ようとはしない。やがて左の岸に山の背が迫る。それをちらっと見ただけで、もう止まらない——あの山の後ろにはいったい何があるのだろう。おそらく湾があるのだろう。深いのかな？せまいのかな？こういう考えのためにもう、若者たちといっしょに歌っていた舟唄どころではなくなってしまう。若い娘たちの冗談も聞こえなくなってしまう。（中略）

遠い未来や、もののはじめやおわりなど、考えても実際考えられるわけがない。考えてみた連中には、分かっているはずだ。彼らは、まだ年少のころから壮年になってまで、かわせみのようにひとつとところにしゃがんでいる。太陽も、広い海も、美しい娘も見なければ、喜びもなく、無もなく、虚無もない。カバ酒ももう飲む気にならず、村の広場の踊りに来てても下を見ているだけだ。彼らはもう生きてはいない。たとえまだ死んではいないにしても、考えるという重い病気が、彼らを襲っている。（中略）

○考えるという重い病気—思想と書物、そして教養

だから、とりわけいとわしく不吉なことだが、パパラギの考えるすべてのことは、よかろうと悪かろうとみな同じように、しかも直ちに、例の白い薄いむしろの上へ投げ出されるのである。これをパパラギは「思想が印刷される」と言う。（中略）

こうしてできたたくさんの思想のむしろは、押し縮められて小さな束になり、——それをパパラギは「書物」と呼ぶのだが——大きな国の隅々にまで配られる。これらの思想を受け入れたものはみな、やがて同じ病気をうつされるのだが、だれでも、この思想のむしろを甘いバナナのようにむさぼり食う。思想のむしろはどの小屋にもあり、箱いっぱい集めてあって、老いも若きも、ねずみが砂糖きびを食うように、このむしろをかじる。だからパパラギの中には、真正直なサモア人ならだれもがしているような自然な考え方で、ものを考えられる人はほとんどいない、ということになる。

同じようにして子どもたちの頭にも、詰め込んで詰め込めるだけの思想が押し込まれる。子供たちは毎日強制的に、決められた量の思想のむしろをかじらなければならない。子どもたちのうち特に健康な子どもだけは、こうした思想に反発する。あるいは網をくぐり抜けさせるように、心の中でふるい落とししてしまう。しかし、たいいていの子どもはたくさんの思想を頭の中に積み過ぎてしまい、もうどこにも隙間はなく、光さえもうさしてはこない。そしてこのことを「教育する」といい、このような頭の混乱が続く状態を「教養」と呼び、それが国中に行き渡っている。

教養というのはつまりこうである。頭のいちばんぎりぎりのところまで知識を満たすこと。

○考えるという重い病気ー“病気”の治療・まとめ

たった一つ、考え病患者を治せるかもしれない方法がある。忘れること、思想を投げ捨てることである。だがそれをだれも習おうとしないから、うまく忘れることの出来る人はほとんどいない。たいてい人は頭の中の積み荷をひきずりまわり、重荷に疲れて力なく、その年でもないのにしぼんでしまう。

(中略)

私たちの体を一層強くし、心を一層楽しく快くすることでなければ、何もしてはならないし、することは許されぬ。私たちは、私たちの暮らしの喜びを奪うすべてのものから、自分を守らねばならぬ。心を曇らせ、明るい心の光を奪う全てのものから、私たちの頭と心を戦わせてしまうすべての物から、自分を守らなければならない。